自分の目でしかわからないもの（ベルギーの奇想の系譜展感想）

外国語学部　中国語学科　4年　三浦　綾音

きっかけは芸術に対する関心だとかそういった崇高な物ではなかった。私には人生の師匠と呼べる人が数人いて、そのうちの1人から唐突にチャットが送られてきたのである。「この展示会は絶対に楽しめるから行ってみるといいよ」と。その師匠の嗜好と私の嗜好は方向性が似ており既に六年を越える付き合いだった。なのでどちらかというと師匠が私に見て欲しいと思った物を見てみたい、くらいの気持ちで行く事を決めた。

そんなベルギーの奇想の系譜展は渋谷のBunkamuraで夏から秋にかけて開催していた。展示品は中世から現代アートと幅広く、立体物や版画、絵画と様々な作品が揃っていた。取り扱われる作品は名前の通り「奇想」に沿った物で不思議で不気味な作品の巣窟という感じだった。しかしただ不気味なだけではなく作品の中にはその時代の政治批判など世に対する風刺などがひっそりと紛れ込んでいる所が非常に面白い。考察したり深読みするのが好きな人はぜひ行って見て欲しかったものである。

入場してすぐ目に入って来るのがスカラベ（フンコロガシ）の羽によって西洋甲冑を形作られた「フランダースの戦士」という立体作品である。来て早々この展示会に耐えらえるかどうかの客選別でも行われているのではないかと一瞬疑ってしまった。案外近くまで寄る事が出来るためにびっしりと埋め尽くされたスカラベの羽をまじまじと見る事が出来、少しの嫌悪感を抱くものの、光を反射する羽の美しさは他のものでは表せない不思議な神秘さもあった。

↑ヤン・ファーブル《フランダースの戦士（絶望の戦士）》1996年昆虫、甲冑、金網、木材 国立国際美術館 ©Jan Fabre ー SABAM, Bruxelles & JASPAR, Tokyo, 2017 E2607 撮影：福永一夫

足を進めると絵画や版画の展示に移っていく。入口近くの展示品は一つの話から様々な作家達が自分の世界に落とし込んで描た共通テーマ作品集のようなものだった。好奇心はそそられたものの特別これが面白い！というのは特に無かったと思う。強いて言えば版画作品はペン画より何倍も精密な絵が描けるために細かい描写に大変興奮させられた。公式サイトにも乗っている「反逆天使と戦う大天使聖ミカエル」などは特に素晴らしく、一体どれほどの集中力があればあのような大作を描けるのかと内心はしゃいだものである。

一つ一つ紹介すると一番取り上げたい作品についての印象が薄れてしまうと思ったのでここで話し始めたいと思う。展示もそろそろ終わるといったくらいの所で特別印象の強い作品と出会った。印象の

↑ペーテル・パウル・ルーベンス［原画］, リュカス・フォルステルマン（父）［彫版］《反逆天使と戦う大天使聖ミカエル》1621年 エングレーヴィング・紙 ベルギー王立図書館

強い、というと大分理性的に聞こえるかもしれないが本当に体が動かなくなったのだ。一目惚れだった。詩のような言い回しで書いていて恥ずかしくなるのだが。美術館へ行ってまさかこの絵が欲しい、という感想を抱く事になるとは私は全く思っていなかった。その絵はジャン・デルヴィルの「レテ河の水を飲むダンテ」という作品だ。この作品は詩人ダンテの「神曲」という作品がモデルになっている。冥界にあるレテ河の水を飲むと転生前の記憶が全てなくなると言われており、ダンテは苦い恋の記憶を忘れる為に今その水を女性の掌から啜ろうとしている、というシーンである。物語も非常に美しいのだがとにかくその絵画が素晴らしい。サイズが非常に大きく、縦142.5cm×横179cmと壁一面に飾られていた。この絵はそれほど写実的な作品ではなくパステルカラーを多用しているのでむしろファンタジー寄りの絵だと言える。しかし私からすれば額縁は窓枠のようなもので額を潜ればレテ河に繋がっているのではないか？と思ってしまうくらいには世界が完成していると感じた。二人の周りの草花は全て美しく咲き誇っており枯れた物が一つもなくその世界がいかに異質かを主張していた。また光の色が淡いオレンジ色であったりぼんやりとした白色のように見える事もある為時間も曖昧で酷く不思議で美しかった。二人の表情は非常に穏やかだが何を考えているのか全く分からない為に感情移入も出来ない。作品との距離は近いのに絵以上の世界を感じてしまったために酷く遠くの存在というか、除け者にされたような不思議な感情になったのを覚えている。

この後も展示が少しありのんびりと自分のペースで回ったのだがやはり先ほどの作品の衝撃が強すぎたせいかあまり集中して見られなかったのが残念だった。売店に寄った際展示品図録を見つけ、これなら手っ取り早く絵をいつでも見れる！と思い嬉々として手に取り開いたが駄目だった。先ほど見て来

↑ジャン・デルヴィル《レテ河の水を飲むダンテ》1919年 油彩・キャンヴァス 姫路市立美術館

た生の「レテ河の水を飲むダンテ」と図録に乗っている「レテ河の水を飲むダンテ」はまるで別物だったのだ。印刷技術が高い段階に突入していると信じていたもののやはり自分で見た物と印刷物の中の作品は全く別の色をしている。印刷物の中の「レテ河の水を飲むダンテ」は私に何も語りかけてこない、そのような感想を抱いた。苦し紛れにポストカードを買ったがやはり別の物に見えてきてしまい逆に苦しくなる事があった。

ベルギーの奇想の系譜展は九月に終了してしまったわけだがその「レテ河の水を飲むダンテ」はどうやら姫路市立美術館に所蔵されているそうなので将来的にそちらへ見に行きたいと思っている。数年前の私は美術館や展示会にお金を出す意味を見出せないと思っていたわけだが、今回の展示会によって本物を直接見る興奮をしっかり覚えてしまった。まさしく師匠の言う通り「楽しめた」わけで感謝が尽きない。しかし今でも絵の事を思い出しては花の色や日差しの柔らかさに思いを馳せてしまうので少々傷は深めだと感じる。この年で新たに見つけた趣味を大切にしていきたいと思う。

↑展示会ポスター